

NO LIMIT! ー限りなき山行ー

8000m峰に挑み続けて

近藤和美

登山家、高峰ガイド

1941年11月、名古屋市生まれ、76歳。戦後の混乱期に父の病気もあって極貧生活を送った。中学生時代には全級テストで学年1位を何度か獲得したが進学は叶わず、57年、中学卒業と同時に印刷所に就職。

2年後、17歳時に父の知人の仲介で上京・就職。軽登山に触れ、以後次第に岩登り・冬山の世界に進む。鹿島槍北壁・荒沢奥壁、不帰東面、越後荒沢山東面などでいくつかの冬季初登攀などの足跡を残す。

1972年に初の海外登山としてアルプスに赴き、マッターホルン北壁ほかを登攀。

76年、17年勤めた会社を辞し初のヒマラヤ遠征。インドの6800m前後の2座を縦走。

84年に初めてソ連領（当時）中央アジアの高峰を訪れ、以後、91年までに6回遠征。パミールのコムニズム（7495m）や天山山脈のポベータ（7439m）など、ソ連の7000m峰全5座を完登。ソ連山岳連盟から「Snow Leopard（雪豹）登山家」称号を得た。

92年、50歳にして初の8000m峰チョーオユーに無酸素登頂。以後26年間に22回8000m峰に挑む。最初のチョーオユーを除いて全て隊長を務め、自身も9座に延べ10回登頂した。61歳時に登頂したガッシャーブルム2峰は8000m峰無酸素登頂の日本人最高齢記録で、

14年間更新されていない。これらの成果も40歳代に足しげく通ったパミール・天山でのセミアルパインスタイルによる高峰登山経験が下地になったと考えている。

しかしながら登山界も近年の労働情勢から無縁ではなく、長期の日数を要する超高峰への同行者が得にくくなり、自身の体力低下も相まって8000m峰へのトライ自体が難しくなっているが、まだまだ夢は持ち続けたいと願っている。

青壮年期には一線級クライマーを自負していたが、今はピークハンターが自分の本質なのかなと思ったりしている。

仕事は57～76年は印刷工、77～84年は日本勤労者山岳連盟発行の「山と仲間」誌の編集、85～92年はフリーランスとして『山岳年鑑』などの編集に携るが、87年以降は徐々に登山ガイド、特に高峰登山リーダー、ガイド業に軸足を移した。

著書・編著書として『魅惑の氷壁』『山一生きる・学ぶ・探る』『冬山』『谷川岳・苗場山・武尊山』など。

日本勤労者山岳連盟名誉会員、日本山岳・スポーツクライミング協会国際委員。



冬季アンナプルナ北面の登攀（2013年12月）
冬の北面ということで陽光に恵まれず厳しい登攀だった